

最近、小・中・高校で「朝の読書」をすることが多くなり、その実践校は全国で1万校を超えたという。その児童生徒数は400万人になる。毎朝、授業開始前のホームルームの10分間から15分間、自分の好きな本を持参するか図書室から借りるかして読むだけなのだが、この「朝の読書」が軌道に乗ってくると、子どもたちの授業に対する集中力が増し、先生の話の聞く力がついてきたばかりか、遅刻、不登校、いじめが激減した学校が多いという。

このように教室内で全員が静かに読書するだけで子どもたちに驚くほどの変化が生じたのは、なぜなのだろうか。本を読むこともなく、友達とおしゃべりやテレビゲームで遊ぶだけの日常と比較してみると、読書がもたらすものがかなりはっきりと見えてくる。それは、次のようにまとめることができよう。

友達から自分を切り離して過ごす時間を持つことになる。

テレビのアニメやドラマを見るのは受動的な情報の受け入れ方であるのに対し、読書は心の持ち方が能動的になる。

物語の面白さを覚え、感性が育まれるとともに他者を理解する心も成長してくる。

自分のペース(自分の内なる時計の針の動き)にそって、じっくりと物語の展開を追うことができるようになり、考える力もついてくる。

読書のこうした特質は、ケータイ・ネット時代のコミュニケーションの特質と極めて対照的だ。ケータイ・ネット時代の特質を挙げるなら、次のようにならうか。

交信相手を絶えず求めてやまない。

瞬間瞬間の断片的な言葉のやり取りで時間を過ごす。

手紙の往復のように、じっくりと考えて文章を書き、じっくりと考えて返事を書くというゆったりとした時間の流れや「待つ」という心の持ち方は通用せず、即答しないと関係が切れてしまう。

気に入らないと、相手との関係をボタンひとつで切れてしまう。

自分を見つめたり相手を深く理解したりするようなコミュニケーション手段ではない。

いま「朝の読書」がもたらしつつあるものを分析的に見つめると、電子メディア時代が子どもたちの心と人間形成にもたらしているものが逆照射され、読書の新しい意味と重要性が浮き彫りになってくる。アメリカの思想史研究者バリー・サンダースの警世の本『本が死ぬところ暴力が生まれる 電子メディア時代における人間性の崩壊』(杉本卓訳、新曜社、1998年)は、子どもたちがテレビやパソコンなどの電子メディアにどっぷりとひたっている現代の状況と言語で理解したり表現したりする能力の低下とが、子どもたちの暴力化と密接に関係していることを説いているが、その状況は日本にもそっくり当てはまる。電子メディア時代、ケータイ・ネット時代が子どもたちの人間形成にどのようなゆがみをもたらしつつあるのか、専門家によるその構造解明と修復策の提示は急務だ。

(柳田邦男『「人生の答え」の出し方』より)